

Title	前近代イギリス家族史：1980年代前半の研究史
Sub Title	Family and society in pre-modern England : a historiography
Author	米山, 秀
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1987
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.80, No.1 (1987. 4) ,p.68- 81
JaLC DOI	10.14991/001.19870401-0068
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19870401-0068">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19870401-0068</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 前近代イギリス家族史

—1980年代前半の研究史—

米山 秀

## 〔I〕

本稿は、1980年代に入り多様化しつつあるイギリス家族史研究の欧米での新たな諸潮流を紹介する試みである。しかし同時に、経済史・政治史を中心に蓄積されてきた日本での研究史との関係を展望しようとする試みでもある。なお、主として対象とされる時期は、ピューリタン革命に先立つ一世紀である<sup>(1)</sup>。

『学際歴史研究誌』の研究史シリーズの一つにおいて、L. Stone は、家族史研究の飛躍的増加という現象が、イギリス、フランス、アメリカの三国で、1970年代に生じたことを統計を以て示している。Stone は、その社会的背景として、「西欧型家族」(Western family)の急激な変化が70年代にこれらの国々で歴然としてきたことを指摘する。婚姻外性交渉の増加、50%にも及ぶ離婚率、希望子供数の劇的下落、既婚女性の育児家<sup>(2)</sup>事放棄と労働市場への流出といった一連の変化である。これらの変化が、「西欧型家族」を背後で支える歴史的社会的諸条件への関心を高めたとする。しかしその諸条件の解明は、依然として多くが未解決であり、80年代の中心的課題となろうと研究史を総括している。

[Stone, 1981 : pp. 52-54, 83]

一方、70年代におけるイギリス家族史研究の最大の担い手であったケンブリッジ・グループの研究者たちには、Stone の指摘とはやや異なる問題関心を指摘することができる。70年代に入り、Rostow [1960; (訳) 1961] のテイク・オフ理論に代表される60年代の近代化理論の破綻が明白になるにつれ、様々な批判や、修正の試みがなされてきた。その際、特に批判が集中したのが、そのもつ「収斂理論」(convergence theory)としての性格であったといえる [Wehler, 1975 : 16; (訳) 1977 : 35]。ケンブリッジ・グループの代表者の一人でもある E. A. Wrigley は、「今日のアジア・アフリカ」の変革と「過去のヨーロッパ」の発展の安易な相互類推を批判すると共に、「近代化」(modernization)と「産業化」(industrialization)との相互促進的理解をも批判し、「収斂理論」の修正を主張している [Wrigley, 1972 : 228, 247]<sup>(3)</sup>。

この主張の経験的根拠として、イギリス家族史に関し、以下の二点が強調されることになる。第一に、今日の第三世界とは異なり、イギリスでは「産業革命」に先立つ数世紀以前に「近代的家族」(modern family)の諸特徴が存在したこと、第二に、イギリス「産業革

注(1) 日本におけるイギリス家族史研究は、中世に関しては鶴川 [1968] 以来、三好 [1981] などによって相続関係を中心として多くの蓄積がある。一方、産業革命期に関しては、最近川北 [1979]、森 [1984] などの研究が相次いで出現している。これに対して、本稿が対象としている時期に関しては、椎名 [1982] が農民層分解の家族史的局面を扱っているものの、フランス、アメリカなどに比して研究が立ち遅れていることは否めない。

(2) 現時点では、まだアメリカ固有の状況として、70年代における女性解放運動の昂揚と性的解放の自由化という社会的背景も併せて指摘されている。

(3) すでに、60年代中葉に、Ôtsuka [1965; (訳) 1969] は、日本近世史に関し「近代化」と「産業化」の「乖離」を指摘している。但し、両者の用語法は微妙にずれ、「産業化」では、大塚が産業の経営化を Wrigley が一人当たり所得の増加を、「近代化」では、大塚が共同体の終局的解体を、Wrigley が計算可能な合理的行動をそれぞれ中心的含意としている。[Ôtsuka, 1965 : 390-391; (訳) 1969 : 276-277; Wrigley, 1972 : 227-233]。

命」の過程には、親族関係の復活といった「近代化を妨害」する要因もみられるという二点である〔Wrigley, 1977: 77-82〕。

70年代における近代化理論の挫折とイギリス家族の「連続説」との関係は、イギリス社会史家であると同時に社会人類学者でもある A. Macfarlane の軌跡に最も象徴的である。16・7 世紀イギリスの魔女迫害の研究者〔Macfarlane, 1970〕として出発した彼は、第三世界の実証研究〔Macfarlane, 1976〕を経て、70年代末には以下のような地点に到達した。イギリス史は産業化を望む「第三世界の人々への良き手引」だとしても、両者の相違は決定的で、イギリスでは既に13世紀には親族が力を失っており、「イギリスの現在の家族制度は、ほぼ1250年頃のそれと同じである」と結論する〔Macfarlane, 1978b: 7, 198〕。にもかかわらず、「15世紀から17世紀の間に重要な画期を求める」研究が後を断たないのは、「マルクス・ウェーバー・トーニー・クロノロジー」を安易に前提とした結果であるとして、悉く批判対象とする。この批判は極めて徹底的なもので、ケンブリッジ・グループの一員である Laslett〔1965; (訳) 1986〕の「家長長制論」にも及び、<sup>(4)</sup> 終には、彼自身の魔女研究をも自己批判するに至った〔Macfarlane, 1978b: 56-61〕。

「連続説」が正統説の地位を確かなものにしていった70年代において、ケンブリッジ・グループに対する批判が皆無であったわけではなかった。しかし、それらは、Berkner〔1972〕の「直系家族説」に代表されるように大陸の史実に基づくもの<sup>(6)</sup>、Hill〔1978〕のように方法的批判に留まるものであった。ところが、80年代に入ると、イギリス家族史研究は、70年代とは異なる様相を呈しはじめる。いずれもイギリスの史実に基づく、二つの「段階説」が相次いで登場することになったからである。

〔II〕

『ヒストリー・ワークショップ』誌上に登場した Chaytor〔1980〕は、イングランド北部の農民家族の分析を基礎に、ケンブリッジ・グループの主張を全面的に批判するものであった。この論文の衝撃は極めて大きく、C. Hill は直ちに「もし Miranda Chaytor の諸発見が他の史料から確認されることになるなら、ケンブリッジ・グループの業績の基礎にある、方法論、核家族の優勢、概念枠組といったものに関し大幅な再検討が加えられなくてはならないであろう」〔Hill, 1980: 142〕と絶賛した。一方、ケンブリッジ・グループも直ちに反批判を加え、Wall〔1981〕; Wrightson〔1981〕; Houston & Smith〔1982〕が相次いで登場した。また社会人類学者 Harris〔1982〕は両面批判を試みた。

(1) シェイタ論文

冒頭、男性の窃盗及び女性の不身持(slut)に関する名誉毀損裁判の記録が引用された後、既存の研究に対し、以下の三点の方法的欠陥が指摘される〔Chaytor, 1980: 26-29〕。第一に「形態」や「発生率」に比して「社会関係の内容」が軽視されてきたこと、第二に、一定時点の住民台帳を基礎とする静的分析に終始してきたこと、第三に「世帯」が「独立したトピック」として扱われ、「家族」や「親族」あるいは「外部」<sup>(7)</sup>の社会経済的变化と関連づけて考察されてこなかったこと、の三点である。これらの方法的欠陥は、史料制約にも起因するものであったとし、複数年度の住民台帳が利用可能でしかも良質な教区簿冊の残存するダラムの Ryton 教区が考察対象として選択される〔ibid., 30-31〕<sup>(8)</sup>。更に「家族復元」の精度を高めるためには、

注(4) Laslett は一面において、16世紀以降今世紀初頭まで平均世帯規模の小小ささが「驚異的な抵抗力」をもって持続したことを実証し〔Laslett, 1969〕、また「イギリス革命という慣用語を抹消する試み」〔Laslett, 1965; (訳) 1986〕を企てるなどして連続性を強調するが、他面において、「われら失ないし世界」に存在した家長的の社会関係に郷愁を寄せる〔Laslett, 1965: 4-5; (訳) 1986: 8-9〕、〔小泉, 1979〕という断絶面の強調という二面性を内包している。

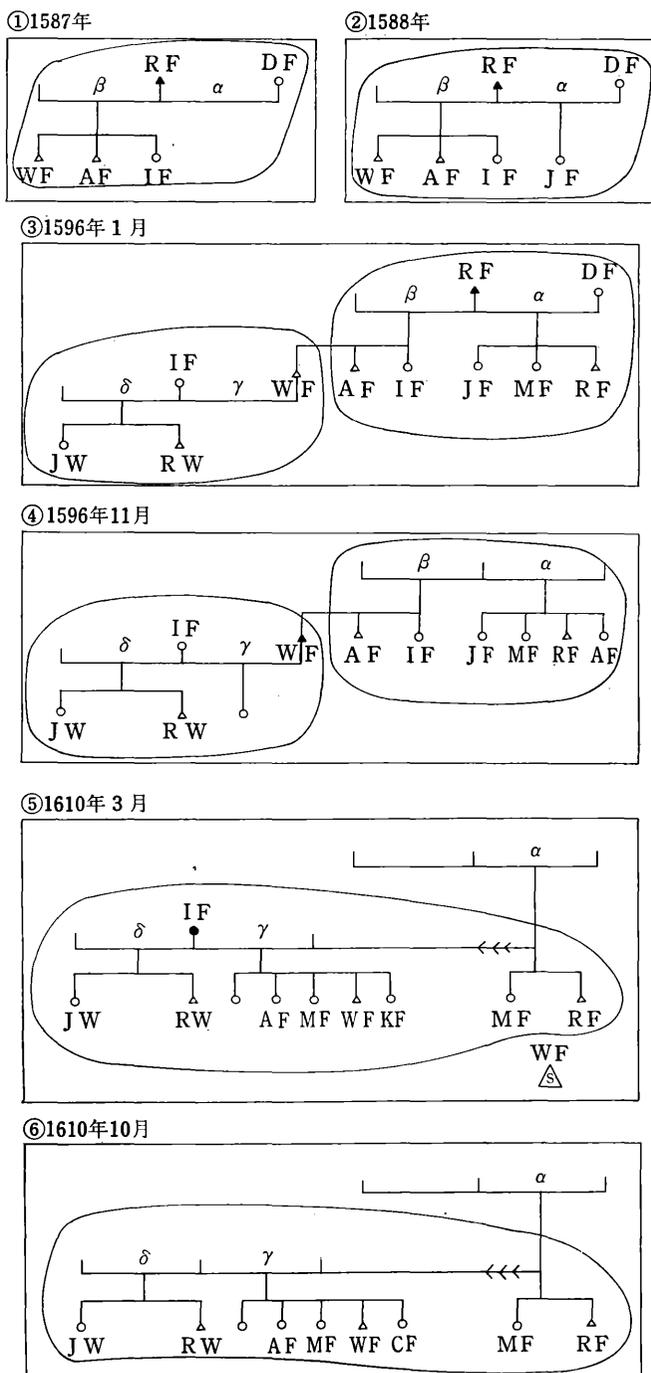
(5) 16世紀における魔女告発の増加の原因を、伝統的な共同体原理と資本主義及びプロテスタンティズムの精神の衝突が生み出した緊張に求めた点において、「マルクス・ウェーバー・トーニー・クロノロジー」に影響されていたと、反省している〔Macfarlane, 1978b: 59〕。浜林〔1978: 159-162〕も参照。

(6) Berkner と Laslett の論争に関しては余宮〔1978; 1980; 1982〕参照。

(7) ヒストリー・ワークショップ運動の評価については、松村〔1979: 159-162〕参照。

(8) 住民台帳としては、十分の一税台帳が利用可能で、1593年以降18年間の5か年に関しほぼ完全な形で残存しており教区簿冊も1582年以降良好であるという〔Chaytor, 1980: 31〕。

第1図 フレンチ家の世帯発達サイクル



〔典拠〕 Chaytor [1980 : 36-39] より作成。記号表示に関しては、ギリシヤ字が「生物学的家族」の核を示す点を除き、Laslett [1972; (訳) 1983] 参照。

一般的姓を避け、教区簿冊と他の複数史料の併用が望ましく、財産目録・遺言状・謄本許可放棄記録、宣誓証書の利用が可能な「富裕ではないが土地を所有する」四世帯が主要考察対象とされ、世帯を「独立のトピック」としてではなく「社会的文脈」の内でも考察することが試みられる。[ibid., 32-35]。

第1図は、Chaytor の French 家に関する「世帯発達サイクル分析」を Laslett [1972; (訳) 1983] の記号表示法を一部修正して整理したものである。世帯の形態は、①単純②単純③拡大④拡大⑤単純⑥単純、というサイクルを示している。また、世帯の生物的家族構成は①二②二③四④四⑤三⑥三というサイクルを示している。この「世帯発達サイクル分析」を基に、Chaytor は以下の三点を指摘する [Chaytor, 1980, 38-39]。第一に、French 家の「世帯発達サイクル」には「拡大世帯」の時期があるにもかかわらず、Ryton に残存している住民台帳はいずれもこれを反映しない。第二に、「単純世帯」の期間も、生物的關係に着目すると、継子や養子を含む「混成」(hybrid) を構成しており、これは飢饉や伝染病に伴う配偶者や両親の死亡及び再婚の作り出すものであった。第三に、この「混成」を生み出す要因は、French 家を多くの親族と関係をもたせることにした。

第1図の⑤から⑥への移行は I. F. (Isabel French) の死亡によるものであるが、彼女の遺産目録の負債リストが次の分析対象とされる [ibid., 39-40]。まず負債総額は81ポンドで彼女の総遺産を1ポンド上回るものであったが、負債内容は収穫の費用といった短期的なものは少なく、大半は三つの親族からの貸付金であった。これらの事実は以下の三つのことを意味しているという。第一に、この階層の未亡人は、経済的には必ずしも困難ではなかったこと、第二に、French 家の資産が二度の結婚による三親族の資産の結合体であったこと、第三に、Isabel の死亡により、親族間で資産の再配分が行われたこと。従って「世帯は親族集団が資産を共有し再配分する場所である」と結論する。

「世帯」に対する「親族」の優越は、裁判記録などからも指摘され、「結婚は、その前後の親族間の交換や義務の連鎖の一環」にすぎないとする [ibid., 41]。また、同じく裁判記録などから、未亡人は経済的状況にかかわらず、性的風評などに傷つけられやすく、未亡人が長期間土地保有者でありつづけることの困難性を示し、イギリス中世の女性を「真の土地保有者」とした Macfarlane [1978b] に対し、「形式上の法的権

利」と「実態」を混同したものであると批判する [Chaytor, 1980: 43-44]。

French 家と同様な分析が他の三世帯 Jupling, Richardson, Hedley についてもなされ、以下の四点が指摘される [ibid., 47-49]。第一に、この三世帯の「発達サイクル分析」は、三世帯がいずれも「拡大世帯」の時期を経験したことを示しており、16世紀末17世紀初頭の Ryton では「拡大世帯」の時期を経験する世帯が「かなり一般的であった」と推論される。しかし、第二に、個々の世帯の「発達サイクル」は極めて多様な形態を示し、「直系家族」のような特定の原理に従うものではない。【第三に、Ryton では、特に女性はかならずしも奉公をせず、結婚まで場合によっては結婚後も生家に居住する事例も存在する。第四に、近隣に居住するこの三世帯の重層的な通婚関係から、三世帯が相互援助やゴシップに対抗する際の親族網であったことが推測される。

以上の Chaytor 論文の内容とケンブリッジ・グループとの対立点は、以下の三点に整理できる。第一に、「発達サイクル分析」に基づき、「拡大世帯」の時期の経験が「少なくとも16世紀末や17世紀初頭の Ryton ではかなり一般的であった」とする主張は、「イングランドにおける過去の世帯は、少なくとも16世紀以降、いかなる定義においても決して拡大することはなかった」という Laslett [1969: 158] の主張と完全に対立する。第二に、高死亡率や未亡人に対する社会的強制が形成する「混成」家族世帯の存在の強調は、Laslett [1969] の「単純世帯の連続性」や Macfarlane [1978b] の「家族制度の連続性」が、住民台帳や法制度における形式法連続性にすぎず、「社会関係の内容」の連続性を意味しないことを示すことになる。第三に、「親族集団の資産の共有・再配分の場所としての世帯」という位置づけは、「核家族を越えた親族関係が、社会関係を形成する重要な独立の要因であったとする根拠は、ほとんど存在しない」という Wrightson & Levine [1979: 102] の主張と対立する。更に Chaytor [1980] と Macfarlane [1978b] の親族関係評価の決定的相違は、後者の分析対象であった Kirkby Lonsdale 教区の史料が17世紀末に偏っていたためであるとし、彼等の親族評価の相違こそが、1600年前後と17世紀末との間に親族関係が弱体化したことを物語っていると主張する [Chaytor, 1980: 59]。この主張は、言うまでもなく [Macfarlane [1978b] の否定した「マルクス・ウェーバー・トニー・クロノロジー」に立

って Macfarlane [1978b] の研究成果を位置付けたことを意味するものであった。

## (2) ケンブリッジ・グループの反批判

『ヒストリー・ワークショップ』誌に相次いで掲載されたケンブリッジ・グループによる反批判は、Wall [1981] が読者投稿という体裁を取っているのに対し、Wrightson [1981] と Houston & Smith [1982] は注付きの独立の論文という形を取っている。また Wrightson [1981] は比較的好意的であるのに対し、Houston & Smith [1982] はほぼ全面批判であるという相違もある。論点も細部では多岐に渡るが、ここでは Chaytor のケンブリッジ・グループ批判の中心にある既述の三点に則して反批判を整理しておく。

第一に、「拡大世帯」に関しては、反批判は史料の解釈とその位置付けをめぐるものとなった。Wall [1981: 199] は、Chaytor が住民台帳として用いた十分の一税台帳の「名前ブロック」が「居住単位すなわち世帯」であるのか十分の一税支払の基礎となる「特定の財産に利害関係を有する人々」であるのか不明確であるとする。Houston & Smith [1982: 121-122] は、台帳のブロックに関して同様な疑問を呈した後、Chaytor の台帳は Laslett のものと異なり、年齢や家長との関係の記載がないため、家長と同姓の奉公人と実子との区別がつかないなどの難点も指摘する。これに対し、Wrightson [1981: 152, 154] は「十分の一税台帳」の解釈では Chaytor と同様の前提に立つ。しかし、Chaytor の検出した「拡大世帯」の出現が一定の原理に従うものではないことを重視しそれらは「個々の家族が特定の状況に従って生ぜしめた」ものにすぎず、「単純世帯」という「支配形態」からの偶発的「変異」(modification) にすぎないという位置付けをあたえる。

第二の反批判は、「混成」家族世帯の形成される程度をめぐるものとなった。Wrightson [1981: 154-155] は、家族の社会層や地域の雇用状況に左右されるとしながらも「奉公」という形での若年での生家からの独立が、生じうる「混成」家族世帯の形成を一定程度減殺していた可能性を主張する。また Houston & Smith [1982: 123-125] は、Chaytor の分析対象が、「混成」を出現させる「過度に特殊」な条件の下にあったことを指摘する。すなわち、この時代に短期的死亡率が危機的状況にあったのはイングランド北部四州のみであり、土地所有未亡人の再婚率を高める「土地

需要圧力」は、16世紀末には14世紀初めと匹敵する例外的高水準にあったことを指摘する。

第三に、Chaytor の示した「親族関係」の評価に対しても同様な反批判が加えられることになる。Wall [1981: 159] は、史料の豊富な家族は、移動性が少なく親族との接触が相対的に稠密な家族であったとし、典型性を問題とする。また、Houston & Smith [1982: 127] は Ryton が炭鉱の近くであることを重視する。Ashton らの研究を基礎に、一般に炭鉱社会では親族帯が重要であり、地理的移動が少なかったことを指摘する。一方 Wrightson [1981: 153, 155-156] は、イギリスの親族関係には不明な点が多いとしながらも、一般に明白な義務や厳密な規則性は見だしえず、その利用は単に当事者の「選択的」なものであり、Chaytor の事例も、その選択肢のいくつかを示すものであるとした。

かくして、Chaytor の「発見」した「拡大」「混成」「親族」といった「単純世帯」からの乖離を示す事例は、いずれも「特殊」な条件の下で、しかも不規則に出現する「変異」にすぎず、段階的相違を示す根拠とはなりえないという位置付けが、ケンブリッジ・グループによってなされたといえる。のみならず、それらの「諸発見」は、「イギリス家族制度のもつ根本的な単純さと柔軟さが、7世紀間にわたって、広範な適応形態を許容してきた」ことを示すものであるとされ [Wrightson, 1981: 157], むしろ「連続説」と補充関係に立つものであると結論されるに至った。

## 〔III〕

Chaytor [1980] と相前後して発表されたのが、Stone [1977] の「段階説」を基礎とする Shammass [1980] であった。

### (1) ストーン説

Stone [1977] は「初期近代、そして恐らくは西洋史一千年の間に生じた最も重要な mentalité の変化」が「疎隔、服従、家父長主義」から「情愛的個人主義 (Affective Individualism)」への変化であったと主張する [Stone, 1977: 4]。この文化的変化の「のぞき窓」として用いられるのが家族で、以下のような家族の「段階説」が展開される [ibid., 4-9, 652-658]。第一段階は1450年から1630年の間に一般的であった「開放的直系家族」(Open Lineage Family) であり、外部

の親族からの影響が大きく家族の境界が開放的で、先祖ないし現存の親族への忠誠心の強さを特徴とする。これと時期を重ねて登場する第二段階は1530年から1700年の「制限的家父長的核家族」(Restricted Patriarchal Nuclear Family)で、対外的に核家族の境界線が強化される一方、内部では既存の家父長の権威が一層強化されることを特徴とする。これらの特徴は、一方における親族の影響力の後退と、他方における国民国家とプロテスタントイズムの影響力の増大のもたらしたものである。絶対君主は服従モデルとして、プロテスタントイズムは家庭礼拝の基礎として、共に既存の家父長制を「再強化」(reinforce)したからである。第三段階は、「閉鎖的家庭的核家族」(Closed Domesticated Nuclear Family)で、核家族の境界の一層の強化と、その内部での家父長制の後退と共に出現した「情愛的個人主義」の生み出した個人の自律の原理と家族員間の強い情愛を特徴とする。この第三段階は、一層親族の影響力が後退する一方、社会的秩序維持にとって絶対君主や家父長が不必要となる1640年以降登場することになる。しかし当初は上層ブルジョア階級と地主階級においてのみであり、他の階層では19世紀まで、主として経済的制約のために、普及が遅れる。かくして近代の「西欧型家族」とは、「極めて限られた特殊な現象」であり、民主主義自体と同様将来生き残り普及してゆく保証はない〔*ibid.*, 687〕と結論される。

以上の Stone 説に対し、まず批判が集中したのは、第三段階の普及に関する部分であった。Hill [1978: 462] の「価値下降浸透仮説」批判に始まり、Macfarlane [1979: 109-110] の「ジェントリー以下への関心の欠如」という指摘、更には Sharpe [1981: 45] の「家族史のウィッグの解釈」というのがその主なところであった。<sup>(9)</sup> こうした一斉攻撃の中で、Stone 自身も、社会的下層に関して「根拠が弱かった」ことを認めざるを得なかった。〔Stone, 1979: 17〕。しかし80年になって、Stone の「段階説」を中層以下で検証しようとする試みが現れた。

アメリカの数量消費経済史家 Shammass [1980] の

試みは、ヨーマン層以下を主要研究対象としてきたレスタ学派の業績と方法に依拠することによって Stone の「段階説」を検証するというものであった。<sup>(10)</sup> 最初に、第一段階と第二段階の比較が、Hoskins [1953] の「大改築」(The Great Rebuilding) 説を基礎とし、同時代人の記録と財産目録を主要史料として試みられる〔Shammass, 1980: 5-10〕。まず1534年の Fitzherbert の『家政の書』の描く家庭像の特徴を以下のように指摘する。第一に、農民の家庭は作業場に似たものとされ、第二に、世帯内の人間的関係には低い価値しか置かれておらず、第三に、夫婦間にも信頼関係が存在しなかったという三点である。一方、1580年代後半の William Harrison の『イングランドの叙景』に述べられている、煙突の増加、マットからベッドへの変化、木食器に代わるしろめ食器の使用という三つの変化が、16世紀から17世紀への農村の家庭生活の変化を示すものであることが指摘される。この二つの時期の比較が、更に16世紀のオックスフォードシャーと17世紀のウスターシャーの財産目録によってなされ、以下の四点が指摘される。第一に、中下層の平均的部屋数が3.6から4.6に増加し、部屋の機能分化が進行していること第二に、ベッドやしろめの普及が確認できること。第三に、聖書や宗教書を含む書籍所有者の割合が1%から1/6に急増したこと、第四に、17世紀でも家庭内消費材の圧倒的比重をベッドが占め、他の家具はほとんど普及していないこと。従って、第二段階に至って「家庭は労働し睡眠しますます祈りの場とはなかったが娯楽や休養の中心ではなかった」とし、再度 Harrison など同時代人の記録が採用され、むしろそうした中心はエールハウスや「お祭り騒ぎ」(feast, orgy) に求められていたことが指摘される。最後に、第三段階として18世紀のマサチューセッツの財産目録が分析され、飲食道具や家具や楽器の普及が析出される。〔*ibid.*, 13-14〕。特にナイフ・フォーク、茶器の一般家庭への普及が重視され「家庭でのお茶付の朝食がエールハウスや主人の家での朝の掻き込み (drufft gulped down) に取って代わった」と第二段階との相違が特徴づけられる。

注(9) Sharpe [1981] の批判は、家庭内暴力の連続性という実証に基づくものであり、その後 Stone [1983] が反批判し、Sharpe [1985]、Stone [1985] と論争展開中である。

(10) Shammass は現代アメリカにおいて「家庭性」(domesticity) すなわち「家庭を非市場的社会関係の中心とすること」が急激に後退しているという事態を重視する点で Stone と共通性をもつ。しかし、「家庭性」の起原に関心が向かうのは Stone とは対照的に、それが放棄されても文明が崩壊するようなことはないことを確認するためであるという〔Shammass, 1980: 3〕。

この Shammas 論文は興味深い試みであったが、既述の Chaytor 論文とは異なり、あまり注目をひかなかったようである。それは、この論文自体が後述するような難点をもつためとも思われるが、この論文の発表直後から Shammas の依拠していた Stone 説の第二段階に対し、かなり有力な実証的批判が開始されたためでもあったと思われる。

## （2）民衆文化史

Reay [1985: preface] によると、「下からの歴史」(History from below) に関する限り、17世紀は18、19世紀と比べて研究が立ち遅れており、漸く最近5年<sup>(11)</sup>間つまり80年代に入って研究が本格化したのだという。17世紀が「革命の世紀」とされることを考えると意外にも思えるが、70年代におけるイギリス革命史研究が後述する「州共同体」学派の全盛下にあったことを考えれば当然の状態であったともいえよう。「州共同体」学派の自己修正が始まる80年代に入ると様々な「下からの歴史」の試みがなされるようになり、既述のケンブリッジ・グループ周辺からもそうした傾向が表面に現れるようになる。その際、「上からの歴史」という要素を随所に示す Stone の「家族発展段階説」が恰好の批判対象として選ばれたことは想像にかたくない。とりわけ、第二段階として「制限的家父長的核家族」の段階を設定したことは、Morgan [1944] 以来の英米の家族史研究の伝統と異なるため、批判がここに集中したと考えられる<sup>(12)</sup>。

Spufford [1981] の Stone 「段階説」批判は、Samuel Pepys の収集した「行商本」(chapbooks) を史料の基礎とするものである。行商人によって売り捌かれた数ペンスのこの低価格本は、「大改築」期のヨーマン層を中心に男子の30%にも登る識字能力を背景に農村にも普及したとされ、これを基礎に「農民の精神世界」の復元を試みることが可能であるとする [ibid., 9, 45]。もちろん「文献的史料」(literary evidence) と「現実」(actual practice) の乖離は指摘されるものの、最近のケンブリッジ・グループの研究蓄積によって克服可能とされ、Pepys のコレクションの三分の一までが「小娯楽本」(small merry books) で占められ、

なかでも「求婚もの」(courtship) に人気が集中していたこと自体、晩婚と高独身者率という当時の歴史人口学的状況から説明されると言う [ibid., 157]。この「求婚もの」からみる限り、結婚に際し親族や父親の影響力は弱く、「カップル相互の個人的感情が最優先する」とし、このことは20%にも登る婚前妊娠率やその裁判において当事者だけの私的結婚の約束が酌量すべき情状と見なされるという「事実」と符合すると言う [ibid., 161, 163, 167]。かくして「行商本物語」という史料は、下層社会のカップルの間には情愛ないしそうした感情に関する知識さえ欠如しているとする Stone 教授の説と完全に矛盾する [ibid., 187] と結論されることになる。

以上の Spufford の Stone 批判は、主として観念の世界が家父長主義一色ではなかったことを示すものであるのに対し、Wrightson [1982] の Stone 批判は「理念」(ideal) と「現実」(real) の両面におけるものである。まず「理念」の最も基本的要素が「夫の至上の権威」にあったことを、William Perkins ら当時のモラリストの著作を典拠に承認する。しかし同時に、Perkins の「連れ合い」(york-fellow) という表現に示されるような夫婦の「相互性」という要素も「理念」として存在したことを指摘する [ibid., 91]。一方「現実」に関しては、<sup>1</sup>同時代の日記を中心的史料とし、社会的下層に関しては遺言状を補助史料として、「強い補完的・同情的エートスの私的 (private) な存在」と「公的 (public) な女性の服従」の併存が指摘される [ibid., 92]。すなわち、社会的最上層などの例外を除き、家内経済、意志決定、不和の解決、性的行動などにおける夫婦の相互性の存在が示されると同時に、公式 (official) な意志表示の際の男性の権威や共同体制裁の際の性的二重基準の存在が示される [ibid., 93-100]。従って、「家父長的 (patriarchal) 結婚」と「友愛的 (companionate) 結婚」は、継起的「段階」(stages) ではなく併存する「極」(poles) であるとし、「Stone 教授に従う理由は少しもない」と結論する [ibid., 103-104]。

注 (11) 「二つの文化」論争に関しては、さしあたり、Collinson [1982]; Ingham [1985]; 近藤 [1986] など参照。

(12) Morgan [1944] には、宗教改革後の家族がいわば Stone の第三段階に近いものと想定してきたと言える。この相違は、恐らく Stone [1977: 4] が「Weber と Burkhart の間」を継承すると述べていることと、関係していると考えられる。例えば Weber には、カルヴァン派と「家父長制」との関係に関する言及がみられるからである [Weber, 1920: 145, 171; (訳) 1962: 下130, 181]。

## 〔IV〕

70年代にケンブリッジ・グループによって確立された「正統説」、「産業革命」以前のイギリス家族の「連続説」は、奇しくもともに80年に発表された二つの論文の「段階説」によって挑戦をうけた。しかし、これら二つの「段階説」はいずれも、その後80年代前半に現れた諸研究によって相次いで批判されていった。その結果、Chaytor [1980] の「発見」は「特殊」な条件の下で不規則に発生した「変異」にすぎず、「段階説」の根拠とはなりえないという位置付がなされた。また Shammas [1980] の依拠した Stone 「段階説」は、少なくともその第二段階と第三段階に関する限り、「公」と「私」という両極を段階と混同したものであったと結論されるに至った。本稿では、以上に概観した一連の動向を評価するに際し、その手がかりを80年代前半を挟む、二つの時期の二つの研究潮流の内に求めることにしたい。その一つは70年代に蓄積されたレスタ学派の「地域類型論」であり、もう一つは80年代後半に入り、しだいに実証的成果を生み出しつつある「州共同体学派」の自己修正の試みである。

## (1) レスタ学派

Thirsk [1961] は、混合農業地域と森林牧畜地域という二つの地域類型を設定し、イングランドのほぼ四分の一の州の史実を基に、後者の社会構造が手工業の発展に適合的であったことを示した。更に Thirsk [1967] では、混合農業地域が三つの小類型に、森林牧畜地域が九つの小類型に区別され、マナ構造・村落構造・相続慣行・社会意識などの比較が全イングランド規模で試みられた。こうした60年代の地域類型論を基礎に、70年代に入ると教区単位のコミュニティの総合研究が相次いで登場してきた。16・17世紀のケンブリッジの三つの教区を比較した Spufford [1974] は、その最も優れた一例とされている。

Spufford が対象とした第一の教区 Chippenham は旧修道院領のチョーク土壌の教区で、ライ麦・大麦の耕作と牛・豚の飼育が中心で、牧羊は荘園の独占であり、一般の農民は排除されていた [ibid., 58-65]。第二の教区 Orwell は王領地で、大麦・カラス麦の耕作と牛などの飼育はみられたものの、牧草地不足のためやはり牧羊の比重は低かった [ibid., 94-99]。共に混合農業地域に属する、この二つの教区には、以下の二

点で相違が指摘しうる。第一の相違は、全く相反する「世帯形成慣行」が存在したことである。Chippenham では、男子準分割相続が行われていたが、未亡人が生存している場合には、亡夫の家と土地は未亡人に生涯相続権が設定され、その残余権が男子に設定されることが一般的であった [ibid., 85, 88]。これに対し、Orwell では長子相続が行われていたが、長男が未成年の場合を除き、未亡人は house room と呼ばれる亡夫の家中の一室が与えられ、長子の耕作する小地片によって扶養されることが一般的であった [ibid., 106, 112-113]。このような慣行の相違は、「拡大世帯」が出現する確率が Chippenham より Orwell の方がはるかに高かったことを意味している。また一方、「混成」家族世帯の形成の一因となる未亡人の再婚の発生率は、Orwell より Chippenham の方が高かったことも想定できる [ibid., 90, 113]。両教区の第二の相違は、「農民層分解」の時期のずれである [ibid., 90, 118, 116]。両教区とも、16世紀末以降の連続的凶作を直接的契機として、15エーカーから45エーカーという中世的標準農が激減し、小屋住と50エーカー以上の層が増加するという現象が17世紀初頭の30年間に生じた点では共通である。しかし、この現象は、Chippenham では17世紀初頭の30年間でほぼ完了したのに対し、Orwell では17世紀末まで完了しなかった。

Spufford の研究に見出しうる「世帯形成慣行」の相違と「農民層分解」の時期の相違との対応関係は、一見 Berkner [1972: 409-410] の「核家族の起源＝農民層分解」仮説を想起せしめるものである。すなわち、「農民層分解」の緩慢な Orwell に、「農民層分解」開始以前の「世帯形成慣行」が濃密に残存していたという想定が可能のようにみえる。しかし、上記の対応関係はそうした想定を支持するものではない。何故なら、第一に「世帯形成慣行」の主要な典拠とされている遺言状の大半は16世紀後半、すなわち「農民層分解」以前のものであり、第二に両教区とも慣行には階層差がみられなかったからである。[Spufford, 1974: 90, 113]。しかしながら、今後もし、「世帯形成慣行」と「農民層分解」の間に同様な対応関係が他の教区からも一般的に確認されるとするならば、Berkner 仮説とは逆に前者が後者の原因の一つであるか、あるいは両者は共に何らかの共通の原因の結果であるという想定が可能となるであろう。またその場合には、「拡大世帯」や「混成」家族世帯は「特殊」な条件下で偶発的に発生するにすぎないとするケンブリッジ・グループ

の主張は、少なくとも上記のようなタイプの「拡大世帯」や「混成」家族世帯には、妥当しないということになる<sup>(13)</sup>。

一方、Chaytor は奇妙なまでにレスタ学派の業績を無視しており、Ryton がいかなる 農業地域類型に属するのかさえ全く言及していない。しかし、教区の南西部がマナの管理の弱い森林であり、近くの炭鉱が農業外副業機会をあたえていたという特徴〔Chaytor, 1980: 31-32〕は、森林牧畜地域と共通性を持ち、また Spufford の第三の教区 Willingham とも共通性をもつ。沼沢地 (fen) の教区 Willingham では、家畜生産や酪農や漁業などが重要な位置を占め、また手工業者など土地に依存しない者の比重は、16世紀末の遺言状の2割強を占めた〔Spufford, 1974: 131-134, 159〕。こうした経済構造は農民層分解を伴わない耕地の小規模化を可能にし、男子均分相続慣行の存在と領主のマナ管理の失敗による流入民のもたらす人口圧が一層小規模化を促進した〔ibid., 159-161〕。一方、成人後の子供が未亡人を扶養することはほとんどみられず、むしろ流入民などと再婚することが前提とされ、また扶養する場合も house room の慣行も存在したものの、別の小屋に移すという他の二教区にはみられない慣行も存在した〔ibid., 162-164〕。これらの慣行の存在は、村落内に「親族」が多数近住する一方、「拡大世帯」の出現は比較的少数であったことを想定させる。従って、もし Ryton にも同様な慣行が存在したとするなら、Chaytor の三つの「発見」の内、「親族」や「混成」を示す事例に比して「拡大」を示す事例により批判が集中したことも当然であったと言える。

一見レスタ学派の成果を基礎にしているようにみえる Shammas [1980] も、地域類型の無視、安易な史料の利用法などが批判されなくてはならない。例えば、Everitt [1967: 442-454] は16世紀後半と17世紀前半の下層農民の財産目録の分析に基づき、二部屋以上の割合や家内財の投資額は、いずれも混合農業地域より森林牧畜地域の方が高かったことを既に検出している。Shammas [1980] のように、時代間比較に異なる地

域の財産目録が用いられた場合、両者の相違が時代によるものなのか、地域によるものなのか不明となる。また、聖書は Shammas [1980] の第二段階の検出にとって決定的な意味をもっていた。しかし、聖書は金銭的価値が低いので、「聖書のある世帯の数の正確な印象を財産目録から得ることは不可能である」ということも既に指摘されているのである〔Spufford, 1974: 211〕。

## （2）修正「州共同体」学派

「社会的統合体」(social entity)としての「地域社会」(local community)というレスタ学派の主張〔米川, 1972: 27〕と結合されることによって、Laslett [1965; (訳) 1986] の「一階級社会」(one-class society)論は、イギリス革命研究における「州共同体」(county community)学派を生み出すことになった〔小泉, 1979: 60-62〕。Everitt [1966] を嚆矢とし、70年代に入ると、以下のような前提に立つ各州単位のイギリス革命研究が一世を風靡した。エリザベス期までに確立された制度、すなわち排他的な「州共同体」を形成し州内の秩序維持を独占するジェントリ集団を通じての統治という制度、を利用することに失敗した初期ステュアート朝の未熟さが、イギリス革命の主因であり、それは制度自体を破壊するものではなかったとする前提である〔Morrill, 1980: 125〕。ところが、80年代に入ると、この学派の内部から、この前提に対する様々な修正の試みが始まった〔今井, 1984: 319-329〕。この試みは、未だ統一的歴史像を呈示するには至っていないように思えるが、85年に発表された論文集の内から、「家父長制秩序」の「理念」と「現実」を対称的な視角から考察している二人のアメリカの政治史家の論文を、ここでは取り上げることにしたい。

Underdown [1985] は、イギリス前近代社会の安定性 (stability) を強調する Laslett らに同意する同時代人はほとんどいなかったとし、「家父長制秩序の危機」こそが当時の文学の最も人気のあるテーマであったことを紹介する〔Underdown, 1985: 116-119〕。そこで

注 (13) Wrightson [1982: 45] は親族ネットワークの密度と農業地域類型の相関に懐疑的な見解を示している。Macfarlane [1978b] が upland で Wrightson & Levine [1979] が lowland で親族関係の希薄さを検出したのに対し、Hey [1974] が upland で親族関係の濃密さを検出したことを、その根拠としている。しかし、この問題との関連で、Hey [1974] だけが、同時代人 Richard Gough の著作を主要典拠としているという史料的背景が考慮されるべきであろう。

(14) 田淵 [1985: 74] は Willingham を混合農業地域の重土地域としてとりあげているが、社会構造の特徴は牧畜地域とかなりの共通性を有する。

問題は、この「危機」が単なる「文芸上の現象」なのか、「事実上の基礎」を有するものなのかということになる〔*ibid.*, 119, 136〕。まず着目されるのが、家族や隣人の悪口を言い回る「がみがみ女」(scold)に対する集団的恥辱儀式(shaming rituals)の道具である「懲罰いす」(cucking stool)の利用分布である。中世末に都市で始まったこの恥辱儀式は、1560年代以降農村でも急増することになるが、同時代人の証言や裁判記録からみる限り、イングランド西部では混合農業<sup>(15)</sup>地域より圧倒的に森林牧畜地域に分布する〔*ibid.*, 123〕。その理由として、以下の二点が指摘される〔*ibid.*, 125, 126, 134〕。第一に、森林牧畜地域のマナ機構の脆弱さや副業の可能性がもたらした流入貧民に蓄積された隣人や家族に対するフラストレーションの心理的捌け口が「がみがみ」という現象形態を取ったという指摘である。第二に、混合農業地域では、教区のエリートや「緊密に結束した隣人たち」による「非行式の調停」という方法が利用可能であったのに対し、「良き隣人性の慣行が後退」していた森林牧畜地域では、そうした方法が利用できなかつたにもかかわらず、「依然として共同体であった」ことが恥辱儀式の盛行に帰結したことが指摘される。更に同様な分布状況が「不貞を働いた妻の夫」(cuckold)に対する「角飾り」の儀式や「反抗的妻」に対する「スキミントン」の儀式に関しても示される〔*ibid.*, 127-132〕。最後に結論として、ジェームズ期の著作家の危機感には「事実上の基礎」が存在したとする。〔*ibid.*, 136〕。

以上のように、「危機」は秩序違反自体と違反規制機構の両面から説明されている。しかし、この説明は「がみがみ女」に妥当したとしても、より「家父長制秩序」的な「不貞を働いた妻の夫」や「反抗的妻」には十全には妥当しないであろう。すなわち、混合農業地域に比して森林牧畜地域が、このような秩序違反を規制することが困難であったとしても、このような秩序違反を生み出しやすかつたことは十分に説明できないからである。この点でも、Underdown<sup>(16)</sup>と対称的な考察方法を取るのが Amussen [1985] である。

Amussen [1985]の考察対象は、Underdown[1985]同様「家父長制秩序」の「理念」と「現実」である。まず「理念」が考察対象とされ、17世紀の著述家たちにみられる「家族と国家の権威構造のアナロジー」には二系列が併存していたことが指摘される。「家父長的政治理論家」が国家内の王の権威を家族内の父の権威から説明する「家族メタファー」の系列と、「家政書作者」が家族内の父の権威を王の権威から説明する「政治メタファー」の系列である〔*ibid.*, 196, 197, 204〕。その後、「政治メタファー」が、「平等と服従の緊張」からピューリタンの「家政書」などにおいては、しだいに修正されていったにもかかわらず、両系列はそれぞれ独立に発展していったため、「家族メタファー」は影響力を失わず、「家族内の出来事」が「社会的意義」を有することを保証し、教会の説教と教義問答を通じ「家族・国家アナロジー」として社会全体に普及していった〔*ibid.*, 202-204〕。[以上のような「理念」の考察に続いて、「理念」と「現実」との関連が考察対象とされ、「家族・国家アナロジー」が「実際上の秩序強制」に如何なる影響を及ぼしたのかという問題が設定され、ノーフォーク州の裁判記録を基礎に以下の三つの分析がなされる〔*ibid.*, 205-216〕。第一の分析は、ノーフォーク及びノリッジの副主教区での社会秩序関連告発記録に基づくもので、まず告発の時期が1560年から1640年に集中していること、種類は「クラス秩序違反」「ジェンダー秩序」<sup>(17)</sup>その他のモラル基準違反に大別されることが示される。更に、「ジェンダー秩序」の「理念」と「現実」の恒常的乖離にもかかわらず、裁判の過程で「秩序」自体が攻撃されることは無かつたことも指摘される。第二の分析は、ノーフォークの四季及び巡回裁判所に対する請願記録に基づくもので、「ジェンダー秩序」違反者が同時に「クラス秩序」違反者である傾向が指摘される。また「クラス秩序」請願の場合、争点は「秩序」の適用のみでなく「秩序」の基準自体である傾向が、教会の席次をめぐる請願例などによって示される。第三の分析は、名誉毀損訴訟記録に基づくもので「秩序」違反へ

注 (15) 浜林 [1978 : 108] は「森林や牧畜地帯に魔女も多いとするヒルの説」(恐らく Hill [1972 : 39]) に疑問を呈しているが、イングランド西部では魔女も森林牧畜地域に多かつたようである〔Underdown, 1985 : 127〕。

(16) 更に、Inglam の主張する「刑罰」と「祝祭」というシャリヴァリの二面性を考慮にいれば、シャリバリの増大を秩序違反の増大からも説明するという方法は一層困難になろう。〔Inglam, 1984 : 92 ; (訳) 1986 : 237〕

(17) ここでのクラスは、いわゆる「階級」という意味ではなく社会的ヒエラルキーにおける上下関係一般を意味し、ジェンダーは家族内の男女関係とそれを基礎に適用された家族外の男女関係を意味するものとされている〔Amussen, 1985 : 206-207〕。

の対応は、告発や請願のような「公式」の対応以外に既述の「恥辱儀式」のような対応、また「噂」や「風評」や治安判事の威嚇や説得のような「非公式」の対応が存在したことが指摘される。更に、牧師とその女性奉公人との間の訴訟事件を例に、「公式」対応と「非公式」対応が、また「クラス秩序」違反と「ジェンダー秩序」違反が複雑に連鎖している「現実」が示される<sup>(18)</sup>。以上の三つの分析に基づいて、以下のような結論が示される〔ibid., 216-217〕。「クラス秩序」が激しく攻撃されていた17世紀前半の「地方名望家」(local notables)は、「クラス秩序」維持の武器として、「秩序」自体としては攻撃されることになかった「ジェンダー秩序」を利用した。その武器を提供したのが、「家族・国家アナロジー」の生み出す「家族関係の公的性格」であった。従って、17世紀後半「クラス秩序」が安定化する一方、「地方名望家」の「非公式」対応が巧妙化すると、「クラス秩序」や「ジェンダー秩序」の違反に対する「公式」対応は激減する。すなわち、17世紀後半の「政治理論家」は、Locke が登場するまで、依然として「家族・国家アナロジー」に固執するが、すでに「地方名望家」は家族を「私的なもの」として扱うに至っていた。

以上の Amussen [1985] の研究史的位置付けは、70年代の「州共同体」学派との十全な比較を待って初めて可能となろう。しかし、現時点でも、以下の二点を Amussen [1985] の研究史的意味として指摘することは可能であろう。第一に「家父長主義」は「理念」の一列にすぎず、「秩序」と実態の乖離という「現実」に関する指摘は、いずれも Wrightson [1982] の Stone [1977] 批判、すなわち「家父長主義」は「理念」においても「現実」においても「公」的「極」にすぎない、という批判を完全に支持するものであ

る。しかし第二に「私」的「極」には然たる変化は指摘しえないのに対し「公」的「極」には、少なくとも「地方名望家」の秩序維持という「現実」の中では17世紀中葉には意味を失い、また「理念」の一列としても17世紀末には終熄するという変化が指摘されており、それらは Stone の「段階説」を直ちに支持するものではないとしても、これらの変化を「連続説」の枠組の中に位置付けることは容易ではないことも示している。

かつて、70年代の研究史を総括した際、M. Anderson はケンブリッジ・グループの家族史研究の限界を「魔法瓶の中の家族」と表現した〔Anderson, 1980: 65〕。Amussen [1985] はこの「魔法瓶」自体の歴史的形過程の一つを示したものとも言える。だとすれば、「魔法瓶」形成以前の社会では「社会的文脈」から切り離された家族の考察は、「実態」と「法的形式」などの混同を引き起こしやす<sup>(19)</sup>いと言える。そこで、「歴史家が直面している緊急課題は、法的記録を同一の人々に関する他の諸記録の文脈の内におくための方法論を発達させることである」〔Macfarlane, 1978a: 89〕という指摘は極めて正当である。にもかかわらず、最近 Macfarlane は「マルサスの結婚制」と呼ぶ近代ヨーロッパの結婚制度を専ら思想的文脈で遡及し、「イギリスにおいては14世紀末までに、恐らくはそれよりはるか以前にかなり発展していた」〔Macfarlane, 1986: 336〕と主張しているのである。

「従って、西ヨーロッパ家族史は、前産業化段階の家族や産業化の間に生じた変化について、確信を持った一般化をなしうる段階には依然としてない」〔Wrigley, 1977: 77〕という10年前の指摘が、少なくともイギリスに関しては今なお有効であると言わざるを得ない<sup>(20)</sup>。

注(18) 「秩序」違反に対する「公式」対応と「非公式」対応の連鎖といった事態や、告発の目的と名目の乖離といった事態は、Cloth Acts 違反に関しても指摘しうる。〔米山, 1981: 68-70〕

(19) Chaytor [1980: 28] は、ケンブリッジ・グループが世帯を「独立のトピック」として考察することの背景に、史料制約と並んで核家族イデオロギーの存在を指摘する。一方、Chaytor [1980] の「社会的文脈」は圧倒的に「親族」で占められており、「親族」という概念の政治的メタファーとしての性格を指摘する批評もある〔Harris, 1982: 150-151〕。

(20) 都市の家族史も未解明な点が多く、今後の研究の進展が期待される分野の一つである。Spufford [1974]; Hey [1974] と共に、70年代レスタ学派の三部作とされる Phythian-Adams [1979: 94-98] は、コベントリでは15世紀末以降、非家父長的な夫婦家族が標準的であったが、「欠損家族」や「再構成家族」が多く含まれている可能性が高いと推測する一方、都市では家族がクラフト仲間に包摂されており、「独立の実体」(self-contained entity)としての側面が弱いという特殊性も指摘している。また Goose [1980: 380] が Cambridge 市内五教区について、小規模核世帯が支配的であるとしながらも、世帯規模と職業との強い相関関係の存在を指摘している点も興味深い。

<引用文献タイトル一覧表>

- Amussen, S. D., [1985]. 'Gender, Family and the Social Order, 1560-1725', *Fletcher & Stevenson*(eds.), [1985].
- Anderson, M., [1980]. *Approaches to the History of the Western Family, 1500-1914*, Macmillan P.
- Berkner, L. K., [1972]. 'The Stem Family and the Developmental Cycle of the Peasant Household: an Eighteenth Century Austrian Example', *American Historical Review*, LXXVII, 2.
- Chaytor, M., [1980]. 'Household and Kinship: late 16th and 17th Centuries', *H. W. J.*, X.
- Collinson, P., [1982]. *The Religion of Protestants: The Church in English Society 1559-1625*, Oxford U. P.
- Everitt, A. M., [1966]. *The Community of Kent and the Great Rebellion 1640-60*, Leicester U. P.
- , [1967]. 'Farm Labourers', *Thirsk* (ed.), [1967].
- Fletcher, A. & J. Stevenson (eds.), [1985]. *Order and Disorder in Early Modern England*, Cambridge U. P.
- Goose, N., [1980]. 'Household Size and Structure in Early-Stuart Cambridge', *Social History*, V, 3.
- 浜林正夫, [1978]. 『魔女の社会史』未来社。
- Harris, O., [1982]. 'Household and Kinship', *H. W. J.*, XIII.
- Hey, D. G., [1974]. *An English Rural Community: Myddle under the Tuders and Stuarts*, Leicester U. P.
- Hill, C., [1972]. *The World Turned Upside Down: Radical Ideas during the English Revolution*, Temple Smith.
- , [1978]. 'Sex, Marriage, and the Family in England' *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXXI, 3.
- , [1980]. 'Household and Kinship', *P. & P.*, 88.
- Hoskins, W. G., [1953]. 'The Rebuilding of Rural England 1570-1640', *P. & P.*, 4.
- Houston, R. and R. Smith, [1982]. 'A New Approach to Family History?', *H. W. J.*, XIV.
- 今井宏, [1984]. 『イギリス革命の政治過程』未来社。
- Inglam, M., [1984]. 'Ridings, Rough Music and The "Reform of Popular Culture" in Early Modern England', *P. & P.*, 105; 松枝到 (訳) [1986]. 「英国の“シャリバリ”と民衆文化」『思想』740, 743.
- , [1985]. 'The Reform of Popular Culture? Sex and Marriage in Early Modern England', *Reay* (ed.), [1985].
- 川北稔, [1979]. 「産業革命と家庭生活」角山栄 (編) 『講座 西洋経済史Ⅱ 産業革命の時代』同文館。
- 小泉徹, [1979]. 「17世紀イギリス史研究の再整理」『西洋史学』116。
- 近藤和彦, [1986]. 「シャリバリ・文化・ホッガース」『思想』740。
- Laslett, P., [1965]. *The World We Have Lost*, Methuen; 2nd ed. [1971]; 3rd ed. [1983]; 川北稔, 指昭博, 山本正 (訳) [1986]. 『われら失いし世界』三嶺書房。
- , [1969]. 'Size and Structure of the Household in England over Three Centuries', *Population Studies*, XXIII, 2.
- , [1972]. 'Introduction: The History of the Family', Laslett, P., and R. Wall (ed.), *Household and Family in Past Time*, Cambridge U. P. [1972]; 林田伸一 (訳) [1983]. 「家族と世帯へのアプローチ」, 二宮宏之, 樺山紘一, 福井憲彦 (編) 『家の歴史社会学』新評論, [1983].

- Macfarlane, A., [1970]. *Witchcraft in Tudor and Stuart England: A regional and comparative study*, Routledge & Kegan Paul.
- , [1976]. *Resources and Population: A Study of the Gurungs of Nepal*, Cambridge U. P.
- , [1978a]. 'Witchcraft in Tudor and Stuart Essex', Cockburn, J. S. (ed.), *Crime in England*, Methuen, [1978].
- , [1978b]. *The Origins of English Individualism: The Family, Property and Social Transition*, Basil Blackwell.
- , [1979]. 'Review of Lawrence Stone, "The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800"', *History and Theory*, XVIII, 1.
- , [1986]. *Marriage and Love in England 1300-1840*, Basil Blackwell.
- 松村高夫, [1979]. 「イギリスにおける社会史研究」角山栄, 速水融(編)『講座 西洋経済史Ⅴ経済史学の発達』同文館。
- 三好洋子, [1981]. 『イギリス中世村落の研究』東大出版会。
- 森建資, [1984]. 「近代イギリスの労使関係と家族関係」『広島大学経済論叢』七, 4。
- Morgan, E. S., [1944]. *The Puritan Family: Essays on Religion and Domestic Relation in Seventeenth-century New England*, Trustees of the Public Library.
- Morrill, J. S., [1980]. *Seventeenth-Century Britain 1603-1714*, Dawson.
- Ōtuka, H., [1965]. 'Modernization Reconsidered—with special reference to Industrialization—', *Developing Economies*, III, 4: 大塚久雄 [1969]. 「近代化と産業化の歴史的関連について——とくに比較経済史の視角から——」『大塚久雄著作集 四』岩波書店。
- Pythian-Adams, C., [1979]. *Desolation of a City, Coventry and the Urban Crisis of the Late Middle Age*, Cambridge U. P.
- Reay, B., (ed.), [1985]. *Popular Culture in 17th-Century England*, Croom Helm.
- Rostow, W. W., [1960]. *The Stages of Economic Growth: A Non Communist Manifesto*, Cambridge U. P.; 木村健康, 久保まち子, 村上泰亮(訳) [1961]. 『経済成長の諸段階——一つの非共産主義宣言——』ダイヤモンド社。
- Shammas, C. [1980]. 'The Domestic Environment in Early Modern England and America', *Journal of Social History*, XIV, 1.
- Sharpe, J. A., [1981]. 'Domestic Homicide in Early Modern England', *Historical Journal*, XXIV, 1.
- , [1985]. 'The History of Violence in England: Some Observations', *P. & P.*, 108.
- 椎名重明, [1982]. 「近代イギリスの家族と世帯」『家族史研究』五, 大月書店。
- Spufford, M., [1974]. *Contrasting Communities: English Villagers in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Cambridge U. P.
- , [1981]. *Small Books and Pleasant Histories: Popular Fiction and Its Readership in Seventeenth-Century England*, Methuen.
- Stone, L., [1977]. *The Family Sex and Marriage in England, 1500-1800*, Haper & Row; Abridged and Revised Edition, Pelican Books, [1979].
- , [1981]. 'Past Achievements and Future Trends of Family in the 1980s', *J. I. H.*, XII, 1.
- , [1983]. 'Interpersonal Violence in English Society 1300-1980', *P. & P.*, 101.
- , [1985]. 'A Rejoinder', *P. & P.*, 108.

前近代イギリス家族史

- 田淵淳一, [1985]. 「イングランド重土地帯における資本主義農業の展開 (1600-1760)」『北海道大学経済学研究』三五, 2。
- Thirsk, J., [1961]. 'Industries in the Contryside', F. J. Fisher (ed.), *Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart England*, Cambridge U. P. [1961].
- (ed.), [1967]. *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. IV, Cambridge U. P.
- , [1967]. 'The Farming Regions of England', *Thirsk* (ed.), [1967].
- 鵜川 馨, [1968]. 「中世英国における農民の家族形態」高橋幸一郎, 古島敏雄 (編)『大塚久雄教授還暦記念, 近代化の経済的基礎』岩波書店。
- Underdown, D. E., [1985]. 'The Taming of the Scold: The Enforcement of Patriarcal Authority in Early Modern England', *Fletcher & Stevenson* (ed.), [1985].
- Wall, R., [1981]. 'Paul Gavarni, Household and Kinship', *H. W. J.*, XII.
- Weber, M., [1920]. 'Die Protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus', M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, J. C. B. Mohr, 1920; 梶山力, 大塚久雄 (訳) 上 [1955] 下 [1962]『プロテスタント主義の倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- Wehler, H. -U., [1975]. *Modernisierungstheorie und Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht; 山口定, 坪郷実, 高橋進 (訳) [1977]. 『近代化理論と歴史学』未来社。
- Wrightson, K. & D. Levine [1979]. *Poverty and Piety in an English Village, Terling, 1525-1700*, Academic P.
- Wrightson, K., [1981]. 'Household and Kinship in Sixteenth-Century England', *H. W. J.*, XII.
- , [1982]. *English Society 1580-1680, Hatchison*.
- Wrigley, E. A., [1972]. 'The Process of Modernization and the Industrial Revolution in England', *J. I. H.*, III, 2.
- , [1977]. 'Reflections on the History of the Family', *Daedalus*, 106.
- 余宮道徳, [1979; 1980; 1982]. 「西ヨーロッパの直系家族をめぐる最近の歴史的家族研究——特にパークナーとラスレットを中心として——」『福岡大学人文論叢』十一, 2; 十二, 3; 十三, 4。
- 米川伸一, [1972]. 『イギリス地域史研究序説』未来社。
- 米山 秀, [1981]. 「'Cloth Acts' の一考察——毛織物生産に関する法律 (1558年) をめぐって——」『社会経済史学』四七, 3。

*Ec. H. R.: Economic History Review.*

*H. W. J.: History Workshop Journal.*

*J. I. H.: Journal of Interdisciplinary History.*

*P. & P.: Past and Present.*

(東京都立商科短期大学助教授)